

子ども教育学科 子どもの学び研究所取組の概要

渡邊 光浩
宮内 孝
川田耕太郎
河野 康男
後藤 吉道
藤本 朋美

1 目的

学部と連携拠点学校園との相互連携協力を深め、実践力を備えた学生の育成及び学校園の教員の資質向上を目指す。

2 研究経過

1) 学部と連携拠点学校園との連携

学部と連携拠点学校園との具体的な連携については、2010 年度からの基本姿勢を継続しながら「子ども支援地域活動」において学生に具体的に携わらせることを原則としてきた。

ねらいは、小学校及び幼稚園並びに保育の場に学生が参加し、子どもを支える地域の活動に参加することを通して、子どもの地域に果たす役割を実践的に理解し、それを支える活動の意味を把握させ、学部の講義で学んだことを実践力へと発展させることである。

2010 年度を連携の基本的な事柄が整備された年として位置付けられ、2011 年度は連携活動を拡大し、2012 年度以降は、連携活動がより円滑化した。

2) 拠点校との連携活動

連携拠点学校園とは研究員を通して、あるいは学校の具体的な教育活動への参加を通して、連携を深めてきた。さらに、拠点校を含む複数の園や学校で、観察実習や教育実習を実施してきた。

3) 研究員と大学教員との共同研究

本研究所での会議が、小学校・幼稚園・大学の教員が集う場であるということから、2024 年度は、「幼児教育と小学校教育の架け橋」の一助となるような共同研究の可能性を探ることにした。

3 活動の具体的内容

2 か月に 1 回程度、16:30 ～ 18:00 までの 1 時間 30 分実施してきた。令和 6 年度の取組の概要は次のとおりである。

1) 主な研究内容

- ・学部と連携拠点学校園との連携の内容、在り方
- ・本学部学生の研究発表等への指導
- ・本学学生への指導的立場からの活動
- ・学校現場の課題や幼児教育と小学校教育の架け橋についての研究協議

活動の柱の一つは、研究員と学生との対談である。教育現場の今日的課題の解決を目指した学生の学修や地域活動について懇談的に指導を受けたり、教育現場の研究員から学ぶ姿勢を学生に身に付けさせたりすることをねらいとしている。

もう一つの柱は、本学のカリキュラムに応じた連携である。教育実習に関する情報やゼミでの研究発表等について共有したり、指導・助言を仰いだりすることとおして、多面的に学び合うことをねらいとしている。

さらに、本研究所が小学校と幼稚園の主幹教諭等と大学教員が集う場であることから、今年度は、「遊び」をテーマとした幼小連携・接続に関する共同研究を行うという新たな柱を設けた。

2) 令和 6 年度の取組

月 日	主な研究内容活動
6 月 11 日(火)	委嘱状交付・年間計画立案
7 月 16 日(火)	幼小連携・接続に関する研究協議①
10 月 15 日(火)	第 3 学年とのグループ別対談
1 月 14 日(火)	第 1 学年とのグループ別対談
2 月 4 日(火)	幼小連携・接続に関する研究協議②

4 活動の実際

1) 活動の概要

(1) 委嘱状交付・年間計画立案

委嘱状交付や大学・学部の取組の紹介を行った後、年間計画を確認し、意見交換を行った。

(2) 幼小連携・接続に関する研究協議①

事前に大学教員で検討を行い、幼小連携・接続を意識した「遊び」を提案し、それをもとに幼稚園での保育や小学校での学習を考えるワークショップを行った上で、意見やアドバイスを募った。



図1 研究協議の様子

(3) 第3学年とのグループ別対談

学校園での教育実習の受入のまとめ役となる主幹教諭や教務主任に、幼稚園や小学校での教育実習を目前に控えた第3学年の学生の質問に答えてもらったり、教育実習に向けての準備や心構えについて話してもらったりした。



図2 第3学年とのグループ別対談の様子

(4) 第1学年とのグループ別対談

第1学年が「子ども教育入門ゼミ」においてグループごとにテーマを決めて調べ、スライドにまとめて、研究員にプレゼンテーションした。発表後、研究員から研究内容やスライドの構成、プレゼンテーションの仕方などについてコメントしてもらった。



図3 第1学年とのグループ別対談の様子

(5) 幼小連携・接続に関する研究協議②

本年度の活動を振り返るとともに、今後の共同研究についての方向性について協議を行った。

2) 結果

研究会の内容と学生の取組に対する成果と課題を見るために、連携拠点学校園の研究員による評価を実施した。また、研究員や学生に自由記述による振り返りも実施した。

学生との対談について、Google Formsを用いて「学びに向かう力・人間性等」「思考力・判断力・表現力」「知識・技能」の3つの観点のそれぞれについて4件法で評価を求めた。各回における評価は次のとおりである。

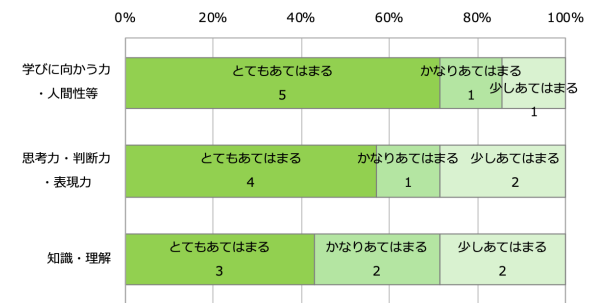


図4 第3学年とのグループ別対談の評価

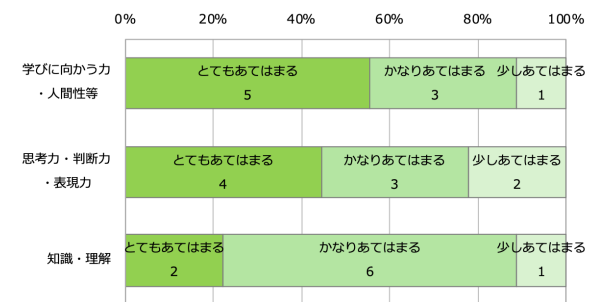


図5 第1学年とのグループ別対談の評価

また、幼小連携・接続に関する研究協議について、1回目はGoogle Formsを用いて自由記述形式で感想を求めた。感想の要約は以下の通りである。

- ・幼小の教員が集まり、初めて実質的な交流が実現した。
- ・グループ討議形式により、活発な意見交換が行われた。
- ・幼児教育の視点や実践方法（導入の工夫、ストーリー性など）から新たな気づきを得ることができた。
- ・活動の目的や意図の共有が十分ではなく、一

部で混乱が生じた。

2回目の協議で出された主な内容は以下の通りである。

- ・幼児期の「遊び」が、子どもの主体的な学びの基盤を形成する重要な営みであることが改めて確認され、小学校教育との接続においてもその意義を共有することができた。
- ・「遊び」を切り口とすることで、幼児期から小学校期への発達の連続性や学びの接続について、具体的な教材や活動の観点から協議が行われ、相互理解が進んだ。
- ・幼児教育における導入の工夫やストーリー性のある展開などが、小学校の授業づくりに対して新たなヒントや刺激となった。

3) 考察

学生との対談において、連携拠点学校園の研究員の評価に「全くあてはまらない」はなく、学生の発言や姿勢に対して高い評価を得ることができた。特に「学びに向かう力・人間性」が高い傾向にあり、本学部学生の姿勢が肯定的にとらえられていると言える。

第3学年との対談における講師の自由記述からは、学生が真剣な姿勢で懇談に臨み、現場の実践に対して関心を持ちながら主体的に質問を行っていたことが分かる。現場教員の話に真摯に耳を傾け、自身の将来像を重ねながら学びを深める姿が見られた点は大きな成果である。学生の振り返りからは、現場の教員から具体的な助言や体験談を聞くことで、実習に向けた心構えや児童・幼児との関わり方について具体的なイメージを持つことができたことが分かる。実習への不安が軽減され自信を持って準備や実践に取り組もうとする姿勢が高まったようである。

第1学年との対談における講師の自由記述では「1年生として素晴らしい内容であった」「今後さらに実体験を重ねて成長していくことを期待している」など、期待と励ましの声が寄せられた。加えて、調査内容の確かさや、地域の実情を踏まえたプレゼンへの共感も見られ、学生の研究の意義と今後の学びへの可能性が示された。学生の振り返りから、興味関心をもとにグループで協力しながら主体的に学びを進め、スライドや発表内容に工夫を凝らしてプレゼンテーションできたことが分かる。他のゼミの発表や講師の指導から多くを学び、現場の教育に対する視点や知識を獲得した

点も大きな成果である。

幼小連携・接続についての研究協議は、幼稚園・小学校・大学の教員が一堂に活動を体験・共有したり、意見交換を行ったりすることで、立場の違いを超えた共通理解を深める貴重な機会となった。グループディスカッションにより、教員同士が自由に意見を交わすことができ、教育観や実践上の考え方の違いを確認しつつも、接続に向けた共通理解を深める機会となった。特に、幼稚園教員による「導入」「ストーリー性」「環境構成」などの実践紹介は、小学校教員にとって新たな気づきや授業改善へのヒントとなっていた。

5 今後の展望及び課題

本学部と連携拠点学校園と「相互の資質向上のための連携の在り方に関する研究」や「人間の発達や育ちに関する研究」を進めることをねらいとして、活動を実施することができた。幼稚園、小学校、大学の教員が定期的に集う場としての本研究所の機能は、校種間や世代間をつなぐ貴重な交流・学びの機会となっている。

第1学年との懇談では、調査や発表を通じて主体的に学びを深め、現場教員からの助言を受けて今後の学びへの意欲を高める姿が見られた。また、第3学年との懇談では、教育実習を目前にした学生が現場教員からの具体的な助言や体験談を通じて、不安を軽減しながら実習への心構えを養う姿が見られた。今後は、こうした学年ごとの特性に応じた懇談の設計を工夫し、より深い学びへとつなげていくようにしたい。第3学年との懇談で学生や講師への連絡が十分でなかったところがあったので、余裕をもって準備・連絡を行い、懇談を更に充実させるようにしたい。

「遊び」をテーマとした幼児教育と小学校教育の接続に関する研究協議では、立場を超えた相互理解が進み、具体的な教材や活動について建設的な意見交換が行われた。今後は、共通テーマに基づく活動や共同実践の開発など、より実践的な研究を展開していきたい。1回目の研究協議では目的の共有が十分ではなく混乱も生じたが、2回目で本研究所の設置目的などを改めて説明し、共通理解を得ることができた。協議を充実させるための低学年担任の参加の提案があったので、研究員の構成について検討を行いたい。

幼稚園、小学校、大学の教員が定期的に集う場としての本研究所の機能は、校種間や世代間をつ

なく貴重な交流・学びの機会となっている。今後
も、地域に根ざした実践研究の拠点としての活動
を充実させるようにしたい。

研究員名簿及び大学側関係教員名簿

	連携学校園名	職 名	氏 名
1	学校法人天竜学園天竜祝吉幼稚園	園長	佐々木 慈 舟
2	学校法人天竜学園天竜幼稚園	主幹教諭	田 實 美 幸
3	学校法人天竜学園天竜第二幼稚園	主幹教諭	北 園 由美子
4	学校法人天竜学園天竜第三幼稚園	主幹教諭	山 城 隆 子
5	学校法人天竜学園天竜祝吉幼稚園	主幹教諭	河 野 祐 子
6	学校法人相愛学園第一幼稚園	主幹教諭	中 尾 恵美子
7	都城市立南小学校	主幹教諭	原 田 勝 哉
8	都城市立東小学校	主幹教諭	嶽 野 直 樹
9	都城市立上長飯小学校	教諭	小山田 祥
10	都城市立祝吉小学校	主幹教諭	永 井 繁 郎
11	三股町立三股小学校	主幹教諭	湯 地 豊 和
12	三股町立三股西小学校	主幹教諭	西 園 修 二

	大学学部名	職 名	氏 名
1	南九州大学人間発達学部	教授	宮 内 孝
2	南九州大学人間発達学部	准教授	川 田 耕太郎
3	南九州大学人間発達学部	准教授	河 野 康 男
4	南九州大学人間発達学部	准教授	後 藤 吉 道
5	南九州大学人間発達学部	准教授	藤 本 朋 美
6	南九州大学人間発達学部	准教授	渡 邊 光 浩